

第34次 第8回
宮城県社会教育委員の会議
会議記録

平成29年11月27日（月）

宮城県教育委員会

第34次（第8回）宮城県社会教育委員の会議 記録

○ 日 時 平成29年11月27日（月） 午後3時00分～午後5時00分

○ 場 所 宮城県行政庁舎12階 1201会議室

○ 出席委員（10名）

相澤美和委員	伊勢みゆき委員	坂口清敏委員
佐々木淳吾委員	佐々木とし子副議長	澁谷秀昭議長
杉山昌行委員	鈴木正博委員	田中康義委員
星山幸男委員		

○ 欠席委員（5名）

齊藤康則委員	鈴木幸三委員	千葉加奈子委員
中路淳子委員	星 美保委員	

○ 事務局 新妻生涯学習課長 今野社会教育専門監 高橋副参事兼課長補佐
吉田課長補佐 成瀬課長補佐 石塚課長補佐
蛭名課長補佐 丹野主幹 菅原主任主査

（司会者）

・こんにちは。定刻でございますので、ただいまから第34次第8回宮城県社会教育委員会を開催いたします。

本日、齊藤委員、鈴木孝三委員、千葉委員、中路委員、星委員が欠席、伊勢委員が遅れてくると連絡が入っています。

情報公開条例第19条によりまして、県の附属機関の会議につきましては、原則公開となっております。本会議につきましては、公開により審議を進めさせていただきます。

それではさっそく議事に入ります。以降の進行につきましては議長お願いいたします。

（澁谷議長）

・改めまして、皆さんこんにちは。暦の上では小雪を超えました。ここずっと暦どおりにはいかない天気が続いてる気がするのですが、ここ数年は暦どおりに雪という字が来ると雪が降るといふことで、このあいだの初雪のように、刻々と季節が移っていくという今日このごろでございます。

さて、今日は、第8回の会議でございます。計画を見ますと、次回9回が1月、3月が

10回というふうなことで、そろそろこの会も、意見書の成文化に向けた協議の段階に入
って来たのかなと思います。

今日は、現地調査の報告、意見書の骨子についての協議となります。

この時間に始まると、終了時間予定が4時50分、恐らく暗くなるのかなと思います。
それはさておきまして、きょうもよろしく御協議、お願い申し上げたいと思います。よろ
しくお願いいたします。

それでは、本日の会議の議事録署名委員2名を指名させていただきます。第7回の議事
録署名委員につきましては、坂口委員と佐々木淳吾委員にお願いします。よろしくお願
いします。

次に傍聴人の取り扱いについて、御説明申し上げます。本会議の傍聴につきましては、
審議会等の公開に関する事務取扱要綱が定められておりますが、本日の傍聴希望者につ
いて御報告願います。

(事務局)

・本日の傍聴者はありません。

(澁谷議長)

・はい、わかりました。なお、審議会等の会議の公開に関する事務取扱要綱第8条によ
り、公開した会議の資料及び発言者を明記した会議録につきましては、県政情報センター
において、3年間、県民の方々の閲覧に供することになっております。

今回は、研修報告が計画されてございますので、前回よりはやや長く、約2時間の予定
でございますが、有意義な意見交換ができますよう御協力をお願い申し上げます。

早速、議事に入ります。現地調査報告でございます。事務局から御説明願います。

(事務局)

・皆さん、こんにちは。先日、現地視察8カ所回らせていただきました。全て同行させて
いただきましたが、お忙しいところお時間を割いていただきまして、ありがとうございました。
また、その後、綿密な報告書をいただきまして、大変感激しております。

本日は、皆様からいただいた報告書と、これまでの審議の中身をもとにプレゼンテーシ
ョンにまとめてみましたので、基本的には画面を見ながら、それからお手元のA3の資料
も見ながら進めていきたいと思っております。画面が見にくい場合は、パワーポイントのスライ
ドもお手元の資料にしておりますのでご覧ください。どうぞよろしくお願いいたします。

概要については私が最初に説明しますが、せっかくなので、視察に行かれた方々に、
二、三分ほど、言い足りないという方は長めでも構わないので、お話をいただいて、1カ
所5分ぐらいずつの見当で進めてまいりたいと思っております。

他の方がお話しいただいたあとに、重複する内容をお話しいただいても構いません。ぜひ

皆様の声をお聞かせていただいて、現地での学びを共有したいと思います。

1 番。石巻市立鮎川小学校の取組。地域で廃れていた伝統芸能、牡鹿銀輪太鼓の再生による地域の復興とコミュニティづくり。捕鯨の衰退により荒れたまちの活気を取り戻そうと、1989年、金華山黒潮太鼓保存会が設立されました。その際、公民館を中心に活動し、地域のお祭りや船おろしなどで、太鼓を披露していましたが、活動のマンネリ化やメンバーの高齢化などにより、一時中断をしておりました。

東日本大震災の数ヶ月後、当時の6年生から「太鼓で地域を元気にしたい」と保存会代表、本取組のキーパーソンである齊藤富嗣さんに申し出があり、小学生を中心に活動が再開しました。現在では、5、6年生が総合的な学習の時間を中心に練習を重ね、学芸会や地域のお祭り等で発表し、地域の方々に元気を届けております。

また、卒業生を中心に有志の太鼓練習会が行われるようになり、中学生、高校生また成人のサークル化が今、進んでおります。この取組につきましては、先日の公民館大会でも第2分科会で発表していただきました。

もう一人のキーパーソンは、震災直後に赴任された山本玲校長先生。社会教育主事の有資格者です。山本校長先生は校庭を埋め尽くす60戸の仮設住宅の方々との交流を目的に、すぐに「ふれあい支え合いプロジェクト」を立ち上げて、仮設住宅の方々と日常的に交流活動を行っていきました。太鼓の活動もその活動の一環とも言えます。

画面をご覧ください。皆さんからいただいた報告書の中のキーワードです。

「人々の心を支えた取組である太鼓が世代をつないでいる」「子供たちの自信となっている」「山本校長、教頭、社会教育主事の経験のある管理職」「新たなコミュニティの形成に寄与」「子供たちに自負心を」「相乗効果」等々。画面にあるもの、無いもの、どちらでも構いませんので、御報告をお願いしたいと思います。

(澁谷議長)

・今、事務局のほうから鮎川小学校の視察につきまして、ポイントを御説明いただきました。実際に行かれた委員さんから、簡単にお話をいただければありがたいと思います。

(坂口委員)

・私のほうからですね、この全体のキーワードとして、世代を超えて宮城らしい新しいコミュニティづくりというのがあったと思いますけど、それに対して考えていくと、新しいものをやるのは世代を超えにくいのではないかなということ、ここでは、その既存のもの、言い換えれば新しくないもののほうが世代を越えやすい。それをずっと昔からいる人も無意識のうちに受け入れやすかったのではないかなと思いました。

もともと地元根ざしていたものであったことが、あるいは伝統的なものごとである、そういうのが無意識のうちに受入やすいものであろうと思います。こういうものはどんな地域にもあるだろうし、こういう決して新しくないけども地元らしい、宮城らしいもの、

ことを核とした活動こそが世代を超えることができる新しいコミュニティづくりに有効なのではないのかなあというふうに感じました。

こういう忘れかけてたものですが、みんなが知っている寄り添えるものがここにはあったと。この全く新しくことを始めたわけでないことが成功の鍵につながったのではないかな、というのが私の感想です。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。

(田中委員)

・私も行かせていただきました。この地域で廃れてしまった伝統文化だったのですが、震災直後というのは、みんなをまとめるというか、元気にするものが必要だということで、地域に昔からあったものを、そして当時の6年生から「あれやりたい」って言ってくれると、やっぱり周りの大人たちも協力してくれるんだなあということがわかりました。

それからあと、震災当時の校長先生が「ふれあい支え合いプロジェクト」ということで、これのすごい応援をしたわけですが、熱い思いを持っていたその当時は、どんどん活性化していったと思います。子供たちもいろんな地域に行ったり、熊本震災も行って来て、自己有用感を高めたりということで、とてもいいとは思いますが、主体になっているのが学校の授業でやっているものですから、その熱い思いをどう引き継ぐのかというのがやっぱり大事なことかなと思います。学校の先生方は異動しますし、地域には高校がなくて、小中学校で太鼓が終わってしまう。高校生になったら、別な地域にみんな行ってしまふのに、なぜこれが必要かということ、再確認するのに非常に苦労したようですが、やっぱり小中学校時代に地元で、自己有用感を育てた生徒は、もし地元から離れても、生きる力を持った社会人になるのではないかと、とかですね、あるいは自分が生まれ育った地域に誇りを持って暮らせるのではないかと、そしてその中の何人かはまた地元に戻って来て、小学生や中学生たちを育てる手助けにもなるのではないかと、というようなことの再認識というか、そういう理念をもう一回確認し合ったことで、また続いていける要素が出てくるのかなあというふうに思いました。

あとは、手伝ってもらえるお父さんお母さん方がもっと増えればいいのか。とつても、地元のなんていうか、特色ある取組には、いいことだなと思いました。以上です。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。

じゃあ、私も簡単にお話させていただきます。

もう既に出ましたが、子供たちがお祭りのメインになって、出てきたら親たちがもう真ん中までごそっと出てきて、本当に子供たちのそういった姿を応援しているんだという

こと、そしてそのパワーにまずは驚きました。

子供たちの目が輝いて、自信が満ちあふれ、地域の一員としての自覚が育っているなあと思いました。

反面、これから先のことを考えると、大変かもしれないなと思いました。つまり、学校の総合的な学習の時間の枠の中での活動なので、社会教育サイドというか行政サイドの支援の姿が残念ながら見えなかった。それについて確認し、聞いたのですがはっきり「公民館の関わりはありませんでした」と話されました。そういったようなことを考えたときに、オール宮城とか、私たちが常に協議したことからも、やはり一つのところだけにお任せというふうなものでは、継続・発展して行くのは、ここから先難しいことになるかもしれないというふうなことも若干気にした次第でございました。以上でございます。鮎川小学校はこれでよろしいですか。次の戸倉のほうですね。

(事務局)

・戸倉小学校と戸倉地区のつながりについて申します。

「みやぎの協働教育」から繋がったコミュニティ地域再生、伝統芸能について、これは何回も本会議でも話題になっている伝統芸能を中心とした取組ですが、特徴的なのは「宮城の協働教育」の最初の年からずっと息の長い取組をしていることです。

南三陸戸倉には、同地区の水戸部発祥とされる「行山流水戸部鹿子躍り」が藩政時代から伝わっていましたが、当地いったん途絶えたものが昭和57年に地元で供養碑が発見されて復活したということです。

現在は、保存会の皆さんが地区の小学生に伝授しています。公民館では、5年生以上の有志児童が、小学校では、6年生になると戸倉地区の伝統芸能として、やはり、ふるさと教育、ふるさと学習として太鼓に取り組んでいます。

卒業式で披露するとともに、伝統芸能文化について学ぶ絶好の機会となっています。本当は、中心となるキーパーソンの村岡さんという方に話をお聞きする予定で、当日、前日まで予定だったのですが、議会が入ったということで、当日は残念ながら御本人にはお話を聞けませんでした。代わりに、当時の社教主事の先生や学校の教頭先生からお話を聞かせていただきました。

ここの取組は、今年、六魂祭にも出演していますし、マスコミ等も取り上げているところなので皆さん御存知の方も多いかと思いますが、息の長い取組をしています。それから先ほど申したとおり太鼓だけではなくてですね、総合的な学習で地元の産業の養蚕、それから鮭の養殖なども、協働教育としてずっと地域と学校が連携して取り組んでいるところです。

(佐々木とし子委員)

・まず戸倉小学校に行きまして、そこで説明をお話しを聞いた後で、本当に感動したと思うのがこのさっき画面にあったように、戸倉小学校の6年生たちが太鼓の実演を目の前で

やってくれて、本当に感動したというか、しかもですね、私たちはすばらしいなと思ったのになんか本人たちは納得いかなくて「もう一度やらせてください」って言われて、もう一度見せていただいたんですよ。ですから二度の感動を味わいながら帰ってきました。

本当にあの長い取組をずっと、学校と地域が連携してやってたなっていうのがすごくそこに行って分かりました。ふるさと教育っていうことで、地域と学校が一体になってやってきたという取組だったんですけども、あの震災でその太鼓は全部流されたんですけども、その瓦礫の下から太鼓が見つかって、それを直していきながら、子供たちにまた教えていきたいということで、復活したんですね。その辺もいろいろ苦労があって、太鼓を元どおりに直して、そして子供たちとの取組ということで、その子供たちの一生懸命さから、地域の大人たちがみんな力と元気をもらったということで、コミュニティの活性化につながっていったっていうこと。それから、やっぱり少子化がすごく進んでいて、学校の子供たちの数も少なくなってきて、この保存会のメンバーも高齢化していて、後継ぎといういろんな問題点も持ってるけれども、でも、子供たちが小学校で体で覚えたことっていうのは、また将来こっちに戻って来て、つないでいってくれるのではないかな、という話をされていました。

キーパーソンの村岡賢一さんという方が当日はいらっしゃらなくて、とても残念だったのですが、それに代わっていろいろな方にお話をお伺いすることができましたし、やっぱりキーパーソンの周りには、それを支える人材もいるんだなっていうのをすごく感じました。それから、学校そのものが地域の人が気軽にに行ける場所になっていることも、保存につながってるのかなっていう感じがしています。以上です。

(澁谷議長)

・はい。ありがとうございました。じゃ、お願いします。

(佐々木淳吾委員)

・はい、私も佐々木としこ委員と一緒に演舞を見せていただいて大変感動しました。印象的だったのは、子供たちの責任感というか使命感と言いますか、このコミュニティの一員として、この太鼓を、踊りをやっているんだというようなですね、先ほどからキーワードにあるよう、自己有用感みたいなものを一人一人がきちんと感じているなということが非常に印象的でした。

どうしてそういう空気ができているんだろうなと考えたときに、やはり先ほどからあるような、地域との協働教育というものを、ここの戸倉小学校が伝統的に行っていること、例えば、地元の鮭の養殖、養蚕といったものを、地域の生業としている人たちから享受を受けながらやってきているということが一つ。

それから、今お話しにもあったような、その地域と学校との距離感ですね。一昨年平成27年に震災後、高台に移転して開校というときにも、保護者でもなんでもない地域の方がたくさん体育館に集まって一緒にお祝いをしたという、この距離感はなかなか正直、都市部で

は難しいだろうなとは思いつつですね、きちんと学校が生徒の安全・安心に配慮しているからこそできる距離感であって、ほかの地域でも大いに参考になるのではないかなというふうに思いました。

(澁谷議長)

・はい。ありがとうございました。次の女川町ですね、お願いいたします。

(事務局)

・では、女川町オール女川の取組。地域の方と派遣社教主事の新しいコミュニティづくり。

当日は、地域の代表の遠藤進さんと、震災当時派遣社教主事だった色川先生、現在の水野派遣社教主事、それから女川町教育委員会の生涯学習課長の佐藤課長さんにも一緒に立ち会っていただいて、お話を聞かせていただきました。

これはたくさんの方がいらっしゃるので、私が説明するよりも皆さんから声を聞かせていただきたいと思います。ここの取組には多くのキーパーソンが関わっています。特に印象的だったのがオール女川の行政の壁を越えた取組。「なぜそれができたのでしょうか」という質問には、「命を守るために、どこの担当だって言ってられなかった。」という答。震災からそれが文化として今もつながり、壁を越えた協働の取組がかなり進んでいて、オール女川で復興を支えている。このようなことを、皆さんが口をそろえて言うところがとても印象的でした。

また、委員さんからもお話があると思いますが、本当に一步間違えれば命を落としていたという状況から、すぐに社会教育の手法を使って、コミュニティを立ち上げていった話は、非常に印象的でした。

写真はありませんが、色川先生は同時、生涯学習センターにいらっしゃって、14メートルの津波を完全にかぶったんですが、生涯学習センターに来られていた町民の方と職員を、一緒に逃げたそうです。上に上に行って4階の給水塔まで逃げて、そこにたまたま窓が無かったため、コップをひっくり返したような形になっていて気密性が高かったために、津波が膝で止まったそうです。もし、隙間があつたらもう命がない。町役場など、遠くから見ていた人たちは、完全に水没したセンターを見て、みんな諦めていたそうです。それを誘導した色川先生。本当にその臨場感がある話に胸が詰まりました。

では、ぜひ、一緒に行った方々からお声を聞かせていただきたいと思います。

(澁谷議長)

・はい、それでは女川のほうはたくさん委員の皆様が行ったようでございます。

この資料にのっとって順番にお願いします。星山委員さんお願いします。

(星山委員)

・ここで一番やはり印象に残ったのは、社会教育の手法って一口で言われてしまっていたん

ですけれども、要するに地域にいろんな方たちがいて、その方たちをどうつないでいくかという、それをやはり社会教育をずっと、主事さんがやってきたことで、地域にどんな人がいるかっていうのが見えてるんですね。

ですから、どこにでもリーダーとなってくれる人はいるわけですがけれども、パッと見るとなかなかどこにどういう人がいるのかが見えない。それを社教主事さんは、ちゃんとわかっていて、その時々でそういう地域の人をつないでいったという、この力はすごいなっていうふうに私は思いました。と同時にやはり、常に市民の声を聞くとか、町民の声を聞くということで、いろんな方たちと話をしているって捉えたこと、それはお茶っこ会かなんかでも具体的な取組としてはそうですし。その他いろんなところで、避難所暮らしのとき、それから仮設ができて、で、仮設から今度出るとき、またどんどんこう・・・被災者のニーズってのは変わっていくわけですよ。それをきちんと捉えてつないでいったってところはすばらしいなっていうふうに私は聞いてまいりました。

(澁谷議長)

・ありがとうございます。杉山委員さんお願いします。

(杉山委員)

・部署間の横の連携がスムーズとか、風通しがいいという印象を私も受けました。こだわりがなく、融通がきくとか、やっぱりいざというときはそういうのがとっても大切なんだろうなと。

女川はおそらく町の規模的にいっても、多分、丁度よかったのかなって思うんですけど。その、みんな日ごろから顔の見える役所でも、地域でも、ある程度顔の見えるおつき合いができていたためにスムーズに、いざというときに動けたのかなと思います。だから、もうちょっと規模の大きい石巻だったり、もっと大きい仙台だったりがまねしようと思ってもなかなか・・・うまくまねできるのかなと。やっぱり日ごろから心がけが大事なんじゃないかなと思いました。

それから、地域の代表者の遠藤さんという方が、避難所で世話役を頼まれ、仮設では自治会の会長さんを頼まれ、あと今度は復興住宅に移ってからは新しい自治会のなんか区長さんみたいなのを引き受けたみたいなんですけど、その、それぞれでまたやっぱり集まって来る人たちが違うので、違う御苦労があったみたいなんです。

避難所は、避難所でもともと顔を知っていればやりやすいかという「あの人がいるから嫌だ」とか、「人間関係が近すぎるために、逆にめんどくさい」と言うような人がいたり、そうでもない。逆に最後の復興住宅は全く知らない人たちが集まってきたんだけど、意外と協力的だった、というようなお話を聞いて、もともとの地域のほうがやりやすいのかなっていうイメージがあったんですけど、そうとも限らないのかなと思いました。だから、そのとき、そのときのいろんな人間関係やしがらみっていうのは、こういう活動するときには考

慮に入れとかなきゃならないんじゃないかなと感じました。

あと、やっぱりどうしても住宅関係の復興が遅いので、人が戻って来ない中で、コミュニティの再生っていうのを、行政が一生懸命取り組んでるんですが、もっとその人を早く戻してあげないと空回りになっちゃうとか、そこの遅れもやっぱり行政の責任が大きいと感じました。以上になります。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。鈴木さん、お願いいたします。

(鈴木委員)

・報告というか、感想になると思うんですけども、私自身女川は、30年前に1回、今回2回目の訪問って形になるんですけども。震災から6年半経過してですね、一定程度復興した状況で、震災直後の状況、承知してないものですから、具体的なその復興状況というのに関しては、先ほど事務局のほうから御案内あったと思います。色川さんという方がですね、リアルタイムで、生涯学習センターっていうのが直接見た、で、具体的な波の高さっていうのが見られるお話いただいたものですから、その女川全体ですね、その震災の状況については、一つの仕様として認識したところですよ。

あと、いろいろお話伺ったかぎりではですね、もともと先ほど適正規模の街の大きさってこともあったんですが、やはりその地域コミュニティっていうか、行政と地域住民とのいい意味でのコミュニケーション。震災直後だったものですから自然発生的な役割分担をしながら徐々にそれを行政がそれをフォローしていくというふうな経過であったんだと、仮設を移転するなりそういった形に推移してきたというふうには聞いてきました。

それに伴う今後のと言うんですかね、教訓という意味合いでは、やはり行政、あるいは社会教育的にはあくまでもフォローとする立場の中ですね、地域にどういった課題があって、その課題に対してどういうふうな道筋の中で、そういう解決能力を持っている人材についてを発掘するっていうか、宝探しじゃないんですけども、そういうネットワークを導いていくっていう方向性が一つこの教訓として女川のお話を聞く上でですね、今後の指針という形では、そういう方向性が必要じゃないかっていうふうには認識したところです。以上です。

(澁谷議長)

・ありがとうございました。では、相澤委員さんお願いいたします。

(相澤委員)

・はい、私は一緒に行かれた委員さんのおりなんですけども、その中でいろいろお話を聞いた中で三つ、自分の中でちょっと印象に残った部分がありました。

一つは、色川先生が、死ぬか生きるかの自分が体験しているのにも関わらずしっかりと使命感を持ってものすごい活躍とか、活動を行ったというそういう人間のパワーと

うか、人間力というかそういったものをすごく感じてまいりました。それが一つです。

もう一つは、その説明の中には入ってはいなかったんですが、帰り際にちょっと靴を履きながら色川先生に「先生、ジュニアリーダーってそのときどうだったんですか」ってお聞きしましたら、「すごくご活躍してくれたんです」っていうその一言だけしか時間がなくて聞けなかったんですが、そのそういった中で、やはりいろんなところでもジュニアリーダーの活動、活躍を聞いてますけども、「やはり女川でもそうだったんだ」と思ったときに、そのいざとなったときに、そのジュニアリーダーが活動できる、そういった組織力、その力をいっつも育てているのは、社会教育の担当の人とかそういった地域の方なんだなって思ったときに、やはり日ごろのそういう育成というもの、組織力の構築というのがものすごく大事なんだなってというのが二つ目、思っただけでまいりました。

あと、最後三つめは、A3版にもちょっと書いてあったんですけど、新しい自治会の誕生、コミュニティの再生、新しい女川まちづくり、若者の存在が大きいと書いてあったんですが、その中で思ったのは、ただの再生、もとに戻すだけの再生ではなくって、進化していく、そういった姿がすごく今の女川から見とれるのかなと思いつつながら、これからどんどんどういうふうに進化していくのかな、楽しみだなって思いつつながらまいりました。以上です。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。次の石巻の高校生カフェについて。

(事務局)

・まず、高校生カフェの「」(かぎかつこ)は、平成25年度、第30次社会教育委員の会議でも取り上げた活動ですが、現状は立ち上げた石巻まちづくりクラブを中心に、子どもたちが中心となった「夢の街プラン」作成をきっかけに高校生たちが始めたカフェです。

ただカフェを出すだけではなくて、地場産品を、インターネットを活用して販売する等の活動も行っています。石巻在住だけではなく、石巻の高校に通っている石巻の外の高校生たちもそこに入って活躍をしています。

また、高校生だった若い人たちが大きくなって戻ってきて、この組織を支えるという循環時期に入って頑張っている部門です。

また、ISHINOMAKI 2.0外から来た若者たちが中心となり地元の若者とネットワークをつくって、石巻桜坂高校のまちづくりの授業、総合的な学習に入るなどの活動をしています。伊勢さんも一緒に活動されています。また、広範囲のNPO、NGO団体とネットワークづくりの核になっています。また、今回、生涯学習審議会でも取材をさせていただきました。ここもたくさんの方がごらんいただきましたし、あと伊勢さんもいらっしゃいますので、ぜひお声を聞かせていただければと思います。よろしくお願ひします。

(澁谷議長)

- ・はい、ありがとうございます。
- ・それでは、伊勢委員さんよろしくお願ひいたします。

(伊勢委員)

- ・はい、遅れて申しわけございませんでした。

石巻の高校生の社会教育の取組というところで、「 」さんと2. 0さんのお話を伺ってまいりました。この2団体とは、私も今桜坂高校にコーディネーターとして入らせていただいているということと、あのNPOの立場でということ、いろんな動きが今起きています。こちらに取材をしたときからですね、さらに本当に動きがいろいろ早いので、新しい動きが次々と生まれているというのが実態かなと思っています。

「 」さんにしても、2. 0さんにしてもですね、高校生に向けてこういう活動をしよという事は立ち上がってはいるんですけども、それを支えている大もとの活動資金というものが、やはり、今、また委託復興支援がらみの予算であったりとか、あとは民間のほうからいただいたり、県の補助金とか、というところがベースにあるので活動の内容もやはりそのときのニーズとか、高校生の状況とか、思いとかによってもちょっと変化しつつあるというのが実態かなと思っています。

そして、その中でやはりそれぞれにですね、新しい取組も始まっているんですけども、ここには載ってないかもしれませんが、それぞれの団体は団体で活動しつつも、団体間、その石巻圏域で活動している団体が手を組んで高校生、中高生に向けた社会教育の面でリーダー育成的なことをやり始めています。ここに入っていない団体がまたいくつかあるんですけどね。というのがまず一つあります。

そしてもう一つの動きとして、やはりこういうNPOとかいろんな団体が石巻エリアはすごく多いんですけども、その団体だけではなく、やっぱり学校と地域とそういう団体と、あと地元の企業さんとか団体の壁を越えての連携という必要性を今すごく感じていて、教育シンポジウム in 石巻というものを昨年度から開催をしています。その事務局をやっているのがこのISHINOMAKI 2. 0になっています。

2月に第1回のシンポジウムを行ってですね、若者をどうやって地域で育てよう、地域で若者を育てようっていうキャッチフレーズでやったんですけども、石巻圏内だけではなくて、他地域から他県からも来ていただいて、県の産業人材育成担当の商工観光部長さんが来てくださったりとか、あとは、教育長さんとか、石巻の境教育長とかも御挨拶に来てくださったということで120名が専修大学に今年集まっていました。

そういう動きがあって、今年度、来年度にね、またこういう若者団体が中心となってますね、いろんな取組が連携をして、いかに今石巻の子供たちを育てているかということで、来年の2月17日にも第2回目を開催するという動きで今動いています。

なので、それぞれの団体にプラスして、思いが詰まった人たちが今その輪を広げようというようなことで、教育行政にももちろん呼びかけをしながら、今動いているという流れがあ

ります。以上でございます。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。それでは坂口議員、何かありましたら。

(坂口議員)

・前に聞いたときから話が少し動いているようではございますが、当時行ったときにはですね、まあ、もう若い人たちが頑張っているなということで、率直に「うらやましいな」と思いました。

ただ、そこにも書いてありますように、その資金面の苦労があったりとか、あと、高校生の輪が広がらない。あとは、学校側との連携がうまくいかないとかといった、そういうところにすごく彼ら自身ももうすでに問題意識を持っていたということですけども、やはりそこが一つ突破しないと、広がっていかないのかなというふうには感じました。

ただ、彼らがやってるのは、先ほどの太鼓と違ってですね、ゼロからのスタートですので、大変だなとは思いますが。しかもですね、彼らはその目標に人材育成ということを言ってます。人材育成である以上は、かなりの長期スパンの計画がないと多分うまくいかないだろうと思いますね。

ただ、その新しいことをやろうとしているので、時代、時代に合わせて変化をしながら、彼らは活動をするんでしょうけども、人材育成を考える際あまり変化をつけすぎると人材が育たなくなってしまうので、その辺りをどのような感じで、中期計画、長期計画でやっていくのかなというのをですね、ちょっとそこがきちんと聞き取れなかったもので、私としてはその辺に課題を感じた次第です。以上です。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。田中委員いいですか。

(田中委員)

・当日見学して来た中では、前の事例とどこが違うかということ、小中学生中心か、高校生が中心かということと、それから伝統がないということと、それか街中だということ、だと思います。

ただ震災を契機に、中学生高校生の活躍はすごく目立って、それこそジュニアリーダーとかが避難所の運営なんかにも随分力を発揮してくれたなと思いますけれども、そこで若者が「自分の育った地域をなんとかしなくちゃ」というふうに考えたことと、このNPO法人の「 」がうまく連携を取って、いろいろ広まっていったのだなというふうに思います。

やっぱり高校生中心だと、卒業すると、就職するか大学に行くかで地域を離れてしまう人が多いので、入れ替わりということが出てきます。まあ、うちの学校の高校生も何人か一緒

に「 」で活動していた生徒もいましたけれども、卒業して地元を離れました。それから、小中学生と違って、高校生で部活に入っても入らなくてもいい学校はうちの定時制高校ぐらいで、他の学校は、必ずどこかの部活に所属しなければいけないという制約がありますし、それから受験もあります。そこでなかなか学校との協力というか連携が難しいのは、この制約が高校生を取り込もうとする団体の悩みにはあるのかなと思いますけど、ただやっぱり地元をなんとかしなくてはという志の高校生が、代わり番にやっているというのは、素晴らしいことだと思います。

ただ資金難と、それからうまく部活とタイアップさせるには、いろんな空き店舗とかで販売したりしている商業高校の研究部というのもあるので、部活とそういうところの学校をターゲットに、連携していくのも継続になっていく力になるのかなという感じがしました。

これからその資金面と、やっぱり高校生と高校との連携っていうのをうまくやっていければ、とってもいい試みだなと思いました。以上です。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございます。私も今お話しされたとおりですが、まずは高校生がさまざまな活動を一生懸命やっている姿に、感動を覚えた次第です。

新しいNPOを中心とした、こういった活動というのは、非常にこう大切なものであるな、すごいな、と思う反面、やはりその運営の面での難しさ、それから学校との関係、地域との関係等については、これからやっぱり時間をかけて取り組んで行かなければいけないことなんだな、ということを感じましたが、総じて高校生がああいった活動をしていることはとても気持ちのいい姿を見せていただきました。ありがとうございます。

続きまして、冒険あそび場ですか。

(事務局)

・次は、冒険遊び場せんだい・みやぎネットワークの、震災後の子供の遊び場づくり、コミュニティづくりの取組です。

ここは荒浜の海浜公園、冒険広場の指定管理者として常設冒険遊び場の運営を2005年から行っていた団体さんです。防災訓練やリーフレット作成等にも取り組んでいて、子供たちがのびのびと遊ぶ、荒浜にあった冒険広場を展開してた団体さんです。

こちらは東日本大震災の発生を受けて、仮設住宅、公園、小学校での遊び場開催を軸に支援活動を展開しました。仮設住宅での縁側倶楽部や、被災地の環境調査にも取り組んでいます。

この後、両佐々木委員からもお話いただきますが、本日欠席の星委員も書かれているとおり、この理事さんのすごいパワーに圧倒されました。

やはり、震災直後に子供たちの遊び場をつくるというのは、かなり壁があったということを知りました。よかれと思ってやっても、やはり最初子供たちの声がうるさいというク

レームにもめげそうになりながら、次第に地域とうまくやりながら事業を展開していった。距離感の取りかたが絶妙なんですね。うまくその距離間を保ちながら、最終的にはここに写っている左端の上のお母さんなのですが、地元のお母さんがリーダーになって、事業そのものを地元に戻したのです。社会教育の理想の一つの形を取られています。ただそのリーダーとなった方も悩みが深いので、孤立しないような配慮を継続されているという取組をされているので、すばらしいなと感じたところです。

では、このあと、委員さんからお声を聞かせていただきたいと思います。

(澁谷議長)

・はい。じゃあお願いします。

(佐々木とし子委員)

・ここは以前、みやぎせんだい子供の丘という名前でした。ここに参加している高橋和恵さんがその理事をしていることでその名前だったんですが、実際にこの取組を行っている団体名は、NPO冒険遊び場せんだい・みやぎネットワークというのが正しい名前です。

仙台の荒井2号公園という仮設住宅があったところにその遊び場をつくって、活動しているということでしたので、その場所にお話を聞きに行きました。真夏の暑い外でお話をずっとお聞きしました。子供たちも遊びに来ている中で、水を飲みに来たりなんかしながら、そのあたたかい雰囲気も味わいながら見させていただきました。

冒険遊び場そのものは、東京のほうから発生して、全国いろいろなところでやっています。宮城県でも古城とか、結構いろんなところでこの冒険遊び場っていうのは開催されているのですが、その中でもあの沿岸部の荒浜で行っていたという活動の理事をしている高橋悦子さんが、この荒井の公園で行った活動なのです。震災当時っていうのは、どこの仮設に行っても子供たちが遊ぶ場所がなく、本当に辛い思いをしているとか、そういう中でやっぱり子供たちが楽しめるっていうかね、体を動かせるような場所をつくりたいっていう思いでこの住宅のそばにある公園にその遊び場をつくったっていうことで、最初は、先ほどもあったように、子供たちの今も、今いろんなところでね子供の声は騒音なんて言われるような感じで、騒いでわいわいって言うと、うるさいというところもあったそうです。でも、だんだんにそのいろんな人たちが来てくれて、見てくれるって、何か言いに来て「うるさい」って言いに来てくれる人は、逆に「すごくラッキーだこの人とつながれる」っていう感覚を持つんだっていう、その考え方がすごくいいなっていう思いながら聞いてきました。

そういうふうにしながら、いろんな仮設の人、それから地域の人たちとつながって子供たちを見守っていくというようなことができていること、それから遊び場にプレイリーダーという方がいます。その中には、東京から仕事をやめてこっちに来てくれた方もいるんです。

最初は幼稚園とかちっちゃい子が遊んでたら、だんだんに話を聞いてくるうちに小学生が集まって来て、そのうちに高校生まで来て、高校生、中学生が来て、こうボール投げし

たり、バレーをしたりっていうんですけど、やっぱり急に来て遊んだわけではなくて、ここに小さい子がいるなって思うと、その場所を避けながらちゃんとこうボールを投げる空間を自分たちで確保して、安全に過ごしているところが、こういう冒険遊び場で培われている子供たちの体験なんだろうなとちょっと思いました。

そこにいる、子育て世代のお母さんが、この取組を引き継いでいくような形で、自分たちもやりはじめました。ただ若いママたちっていうのは、ここに限らずなんですけど、設定されたところに参加するのはいいけれども自分たちから苦勞して参画するっていうのは意外と嫌がるんですっていう話もされていました。

また、結構転勤の人たちが多くて、その人たちが外に行ってしまうと、また新たなそういう人たちと一緒にやってく活動していく人たちっていうのにつなげるっていうのは、大変難しいというお話もされていました。

でも、やっぱりそういう居場所をつくるっていうことは本当にすばらしいし、そういう中でコミュニティもつくられているんだな、と思いながら帰って来ました。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。では、佐々木淳吾委員。

(佐々木淳吾委員)

・私もですね、理事をされている高橋さんのエネルギーと、それから非常に前向きポジティブであるという点に非常に印象を深く思いました。

そして、今出てきた話の中でもですね、少し私なりに思ったことでは、例えばプレイリーダーという東京からいらしたスタッフの方が何人かいらっしやるんですね。このときは一人だったんですけど、きちんとそこにプロとしてのクオリティを求めている、研修もきちんとやってということで、安全・安心な遊び場を提供できているなあという、そのクオリティの確保というものにもきちんと配慮しているなというふうに感じました。

何よりもですね、私がこの現場で印象的だったのがその自主性を重んじている。それが子供に対してもそうだし、地域の大人、保護者、大人に対してもそうだったということでした。子供に対しては、もう少し遊んでるところを見せてもらったんですけど、金づちを持ってトンカトンカやったりするのを見守ってはいるけど、黙っている。

それから、何かこうボール投げたりしても、もちろんその危ないときは「危ない」って言うんだけど、きちんと見ている。子供たちが好きなように何かに取り組む中で、大変その自主性を重んじているというところが印象的でした。

それから、大人に対しての自主性というところでは、やはりその今佐々木とし子委員がおっしゃったような、参加から参画へのハードルというのがやっぱりすごく高いんだなあというふうには思ったんですけど、それでも一生懸命頑張って、この地域の子供たちが遊べる場所をつくってほしいって思っているところのお母さん、大人に対して、距離を適度にとつ

て、何か悩みがあったら相談はできるような距離のところにもいつも立って見て、見守っているけれども、基本的には好きなようにやっごらんさっていう、地域の自主性に託していけるような距離の取り方が大変上手なんだなあというふうに思いました。

ちょっと私の仕事上、その人となりに入っていくことが多く、興味があるものですから、これは高橋さんがそのノウハウの中で培った距離感なのか、それともともとそういった、人との関係、距離の取り方が上手な方、資質のある方なのかというのは、これはどっちなのかなあっていうことを聞いておけばよかったな、と今思っています。

でも、彼女の距離の取り方っていうのは、非常に参考になる清々しいものがあり、でも、いろんな御苦労もあるんだろうなあとも感じました。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。

それではですね、次、これから予定されているのが、鳴子の米、それから名取市公民館、米山公民館の三つあるので、ここからは少し巻いてお願いしたいと思います。

(事務局)

・鳴子は千葉委員と二人で行って来ました。大きなポイントは、公民館職員それからNPO地域の方々が参加でコラボしてずっと息の長い取組をしているというものです。震災で大きなダメージを受けたものの、農業を中心に米づくりで地域おこしをしてできた新しいコミュニティが機能し、全国の御支援をもらいながら立ち直ったという実践です。

当日は、稲刈りに行ったんですが、いろいろな人が百人以上集まって来て、ものすごくいい雰囲気です。稲刈りを楽しんでいらっしやいました。詳しくはそこに書いてあるとおりですのでお読みください。3者による取組です。

(澁谷議員)

・それでは、千葉委員さんきょうは御欠席ですので、あとは資料をお読みいただければというふうに思います。続きまして、名取市公民館のワークショップをお願いします。

(事務局)

・これも取組の概要を含めて、では星山さんからお話いただければと思います。

(澁谷議長)

・それでは、星山委員さんお願いいたします。

(星山委員)

・名取市は、体制が変わってから随分と雰囲気が変わってやりやすくなったそうです。市全

体がですね、やはりコミュニティづくりをこれからして行かなきゃいけないと。その中で、公民館の果たす役割が非常に重要で、地域課題は何かっていうことを地域の人々と一緒に、職員も把握していこうという姿勢で今取り組んでいるっていうところが特徴なのかなっていうふうに思いました。

やはり地域の住民も育っていきますけれども、職員も一緒に育って、やり取りをしながら育っていくんだというふうに、その意識が大変強いなってというのが非常に印象的でしたね。

そういう中で、最初は市民のほうから役所の押しつけじゃないかって反発もあったっていうふうな説明があったんですけども、一生懸命やっていく中で、市民の意見をきちんと取り入れていく。市民参加型の参画型と言ったんですね、の取組であったということが非常に印象的です。

それで、市民が求める公民館像っていうのもあるわけですけども、そういう市民とのやり取りを通じて職員自体がどういう公民館にしていきたいのかっていうのをさらに意識して考えていったという、そのことが名取市の場合は大きかったのかなっていうふうに感じました。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。佐々木としこ委員。

(佐々木としこ委員)

・ほぼ、星山先生から言っていたので、やっぱり公民館が地域コミュニティセンター機能が変わるっていうことで、その運営をNPOとかにね、町内の市民に委ねるっていう中で、いろんな市民から声を聞いて、そして公民館職員も一緒になって公民館をつくっていく、地域をつくっていくというような取組が、すばらしい、いろいろなことができるじゃないかなというふうに思いました。以上です。

(澁谷議長)

・はい。ありがとうございます。佐々木淳吾委員。

(佐々木淳吾委員)

・名取市は広いんですね。沿岸部から高台まである、昔ながらの集落から新興住宅地まである。当然そのまちづくりに対する意識等々にも非常に大きな差がある。その中で市内11の公民館があるということでしたけれども、その地域ごとの特色を、でもこの地域はこうだっで決められるのは当然なくて、いろんな人が住んでるわけで。そういう人たちをどういうふうにその公民館というものを中心にというか、関わり合いながら地域づくりに役立てていくか、参画を促していくかということに、いわゆるコーディネート力というものが非常に職員の皆さん問われているんだろうなというふうに感じました。

ですから、公民館という箱についてのお話を聞きに行ったつもりが、かえってそこに携わっている人たちの熱意とか、市民目線で頑張っている様子といったようなものが見えてきて非常に興味深いリサーチになりました。

(澁谷議長)

はい、ありがとうございました。登米市の米山公民館につきましてお願いいたします。

(事務局)

・ここは完全な指定管理の施設です。それも含めて委員さん方をお願いします。

(澁谷議長)

・はい、星山委員さんお話をお願いします。

(星山委員)

・今、公民館に限らず社会教育施設、あるいは社会教育部門のいろんな公的な施設が指定管理に託されているわけですが、公民館の場合、私個人的には、指定管理委託するのは賛成ではなかったんですけども、でも米山公民館に行って感じたことは、もう今の業者の流れの中で、指定管理委託に歯止めをかけることはなかなか難しいと思っています。そうすると、指定管理委託された中でどうやって、本当に住民目線で公民館をつくっていくかということが大事になるのだと思います。

ここでお話して下さった館長の大瀧さんとはすばらしい方で、いろいろ行政の仕事もしてこられて、生涯学習課にもおられたことで、その経験を生かして本当に尽力しておられました。

そのときにやはり、いくつか主張していたことがあったんですけども、その大事なポイントになる一つは、やはり職員をどう育てるかっていうことですね。

指定管理の場合は、非常に地域の受託した住民団体の中で、どうやって職員を育てていくかってことになるんですけども、そのときに、館長の役割が非常に大きいってことを痛切に感じました。

さまざまな形で研修をしたり、職員も社会教育主事講習に送り込んだりして、最低1館に一人は、社会教育主事の資格を取らせる。その職員はもちろん役所の職員ではなくて、地域の組織の職員なんですけども、その方たちがちゃんと社会教育主事の資格を取って、正面から社会教育に向き合って、どうやって人を育てるかっていうことが大事だっておっしゃっていたのが非常に印象に残りました。これからそういう指定管理委託が増えると思われるので、各地域で大変参考になるのではないのかなというふうに思いました。

それからもう一つは、やはり、どうしても財源の問題が避けては通れないわけですね。そもそも指定管理委託するのは、直轄ではお金がかかるので、委託費を抑えてそれで市全体

の出費を減らそうということが、本音のところであるわけです。ですから、どうしても予算が少ない中でどうやりくりするかということが大きな課題になってくるわけで、いろんなところから教育委員会に限らず、ほかの地域づくりのほうからもこう補助金をもらったりと、そこら辺は、すごくうまくやっているなというのが印象に残りました。

お金がない中で本当にいろんな事業をやっているなっていうふうに思いましたけれども。地域の請け負った組織がですね、いろんな儲けと言ったらいけないんですが、資金を確保するような取組もやってるようなところもあるように伺っております。米山ではまたそういうのは積極的に活動はなされてないけども、いろんな形であの資金の確保っていうこともこれから課題になるのかなっていうことは教えられました。以上です。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。

私も参加させていただきました。星山先生のお話に尽きるんですが、一つだけ感じたことは、指定管理というふうな中で、登米市教育委員会が所轄する公民館なのですが、ここは地域づくり支援員という方が配置されおり、その給料は首長部局である市の企画課が予算を持っていることです。

公民館は、社会教育っていうふうの流れとしてあるのですが、その地域づくりとかコミュニティづくりというふうに絡んでくるものについては、首長部局のほうが予算も持ち、そういう現実なんだなって思います。これから先のことを考えると、そことやっぱりうまく連絡・調整を取りながら、うまく予算をいただいて、社会教育のほうにも充実するような、そういうことがこれから求められてくるんだなというふうなことを感じた次第でございます。以上でございます。

大変すいません。せっかくの思いを十分に聞かされないまま報告をさせていただきました。

それでは次にですね、今、現地調査の説明、1から8までございました。こういった中で、ここから先、事務局のほうが大変御苦勞するんですが、このことをもとにキーワード、これまで何度かお示ししていただきましたが、視点1、視点2、視点3というふうなところからの分析についての説明と提案。そして、あわせてですね時間も押していますので、審議テーマとの関連につきまして一気に御説明いただければと思います。

(事務局)

・時間がないものですからちょっと、今までの振り返りと頭の切り替えにですね、総集編のスライドがありますので、それを見ながら、きょう発表したことを共有したいと思います。その後次の視点ごとの話し合いに移りますので、画面をごらんください。

(スライド鑑賞)

(事務局)

・皆さんからいただいた御意見，それからキーワードを三つの視点で分析をしていきます。そのあと，提言につながるような世代を超えて紡ぎあう宮城らしいコミュニティづくりに関して，その角度から考えていきます。

まず視点1。震災前から震災後にかけてのコミュニティの変化を類型化し，コミュニティづくりが成功した要因やそれを阻害するものを明らかにする。

これを，このように類型化してみました。

A，過去にしっかりとしたコミュニティがあったけれども，震災があった，で，震災を受けて新しいコミュニティができたところ。ふれあい公民館，女川など。

B，多様なコミュニティがある中，震災を受け新しいコミュニティができたところ。石巻は，NPOの活動，それから冒険遊び場の活動。名取市。こっちも絡んでますね，二つ入っていると思います。

C，コミュニティや伝統産業は衰退気味，過疎等の問題そして震災を受け新しいコミュニティができたところ。鮎川小学校，戸倉，鳴子。

それぞれを今度は，キーワードでまとめています。

A，震災前から継続したリーダー＝地域指導者，公民館等の存在。強いリーダーシップが働いていた。縦割り行政の壁を越えた横の連携がうまくいっている。自治意識を育てる仕掛け，取組。社会教育事業をとおしてつくられた人間関係が，災害時の大きな力になった。これはしっかりと地域づくりや社会教育がされてきたところは新しいコミュニティづくりがうまくこうつながっていったと言えます。

課題・阻害要因としては，持続可能な取組のための後継者の育成。青少年の参加が大事であると頑張っているのですが，もう少し上の世代，青少年から上の層年代の社会参加がよく見えないところ。社会教育の切り口から言っても，そこについては課題と言えます。そして行政の具体的な支援や環境支援。

Bです。多様なコミュニティが震災を受けた後，新しいコミュニティに変更したこと。ここで特徴的なのは，NPOの方々の活躍なのですが，新しい視点として，「目的でつながる新しいコミュニティ」の成立。これは，この会議の中でも例として出されていました，「三丁目の夕日型」：いつでも隣の家が何を食べているかわかるようなコミュニティではなく，目的でつながること。ここが特に若い人たちには心地よい，適度な距離感となっている。これが青少年の活動の促進につながっている。SNS等新しいコミュニケーションツールの活用。

地域の自立した活動への移行。これはうまくいっているところもあれば，課題のところもあります。

課題・阻害要因としては若者やNPOの活動に対する学校や家庭の理解不足。先ほどもありましたが，部活動との両立とかですね，そこが課題。昔からジュニアリーダーの活動につ

いては課題と言われてますが、これもやはり同じような課題を抱えている。資金不足。持続可能な活動への不安。人材、輪の広がりが今一つ。行政の支援がどうあるべきか。行政の縦割り、壁というのがこれNPOの方と話するとよくわかるんですが、「窓口どこな」っていうことがあります。資金なども支援とかですね、補助金等の窓口が非常にわかりづらい。行政の中での縦割りや壁がやはり一つ阻害要因になっていると思われま

C。コミュニティや伝統産業が衰退気味であったところ、実際過疎等の問題があったところに震災後の取組で新しいコミュニティができた、鮎川小や戸倉地区、鳴子の米づくりなど。

ここの新しいコミュニティづくりにうまくつながった要因は、地域指導者や、行政職員のリーダーの存在が見えます。地域の伝統文化、産業と地域コンテンツの活用。自治意識、自立者取組への移行がうまくいっていること。これは、まだ途上のところもありますが、成果でもあり課題でもあると言える。それから共通するのは、郷土愛、ふるさと意識の醸成、涵養がよくなされている取組であること。

ここの阻害要因や課題としては、行政の壁や垣根。震災とは別の継続的な地域課題を抱えていたし、これもこれからも抱えているということ。津波で失ったものはたくさんあるけれど、津波で流されて元々の課題が見えてきたともよく言われています。過疎の問題とか。これに関しては、震災を機にプラス面へと移行しているところもあるのですが、長い目で見たときに継続的な課題を抱えている地域は未だ少なくないということです。

視点2にいけます。それぞれの取組におけるキーパーソンについて調査し、コミュニティづくりの中心となる人材の育成。地域からの発掘等についてその有効な方法を探り出す。「人」というキーワードです。

まず、成果がでているところ、地域の伝統芸能文化等の活動による郷土愛の寛容を取り組むことでうまくいっているといえます。地域コンテンツの活用。行政経験を発揮する具体的な取組。これは米山の館長さんなどが最も典型と言いますか。とか鳴子の米づくりなどがそうですね、行政の方の経験を発揮しての取組がなされている。

人と人をつなぐための信頼。強い目的意識、郷土愛、これはもともと住んでいる人の郷土愛。子供たちもそうですが、NPOの方のように外から来た方の存在は大きい。自分のできることはなにかないかという強い目的意識を持ち、活動を支えていらっしゃる。

資料や報告書には非常に書きづらいのですが、「よそ者」「わか者」「ばか者」という言葉、存在。活字になって報告書に載るとちょっと誤解を生むので、なんかうまく書きぶりあるかなと思うんですが、いい意味でのこの方々が支えたことは間違いありません。オールみやぎの旗手としての「よそ者」の活躍。NPOの「わか者」の活躍。固定観念やしがらみにとらわれず思い切った行動でリードする「ばか者」の活躍。

阻害要因や課題としては、持続可能な取組だけの後継者の育成。また、そのフォロワーの育成。周りを取り巻くとか支える人たちが、次もまた支えるというような人たちの育成。あとは行政の具体的な支援、経済的な支援や人材支援、環境支援ですね。

視点3、コミュニティづくりの拠点となる公民館等施設。核となる社会教育主事制度等の

現状と課題。改善策。公民館の実態調査はまだ情報が全部集まっていないので、分析をした上で次回の会議にお示ししますが、その中でも課題として挙げられているものの多くが、次に述べる内容にも関連しています。目的意識を持った職員の姿勢。宮城の協働教育の実践を積み重ねる地域の人々。これは、戸倉の例を見ても、以前からやっているところはやはり強い。社会教育主事、派遣社会教育主事の活躍もいたるところで見られました。米山公民館も、協働教育のスタートは派遣社教主事と大瀧館長さんとの連携でした。一緒に公民館で勤めていて始めたそうです。

阻害要因や課題。公民館直轄、指定管理、共通の課題である職員不足と資金不足。これらは例年の公民館調査でも課題としてあげられていますし、今回の調査でも浮かび上がってきています。実際の声も多く届いています。先ほど話があった人の集まる米川でさえ・・・相当頑張っているんですけど、実際に常勤は三人。館長さんと非常勤職員二人ですよね。っていうところでされています。かなり苦勞されている館が多いです。

それから、直轄もこれは数字的に次回には示せると思いますが、経験の少ない若い職員とあと囑託の館長という構成の館がさらに増えているようです。

ですから、長く社会教育に関わるような職員がその公民館を支えるっていう仕組みがなかなか難しいという実態があります。

それから助成金やよい実践等の情報の入手・共有の要望が特に指定管理の館からよく声が聞こえてきます。横のつながりがなかなかないので、そういう情報が得られにくい。ということで、公民館同士のネットワークづくりも課題と言えると思います。

これらを総合して、ここからテーマに照らし合わせていきます。

ここが本会の最終的な提言につながっていくので、このあと、お話をさせていただいた皆様から、きょうはここについて御意見いただきたいと思います。

まず、世代を超えて紡ぎあうという点から、視点1, 2, 3を含めて分析をしてみました。

- ・目的でつながる新しいコミュニティの有効性。
- ・適度な距離感のある、ウィン・ウインの関係を保つコミュニティ。
- ・新しくはないが地元らしい宮城らしいものやことを核とした活動が世代を超えた活動には有効。＝全く新しいことを始めたわけでないことが成功の鍵。
- ・青少年活動の促進のためのさらなる具体策。＝「第32次：地域をつくる子供たち」、「第33次社会教育委員の会議：子供地域活動への参画」を受けた、さらに具体的な姿を示すことが必要になるといえます。

先ほどのウィン・ウインの関係ですが、これは皆さんのレポートにたくさん出て来ましたし、これまで会議の中もよく出てきた、自己有用感。これは互いのというのは、受けるほうだけではなくてですね、例えば、学校と地域とのつながりですと、今までだとその学校がこ

う一方的に受けるって感じでしたが、そうではなくて、お互いの、例えば教えるほうにも、教えがい、自分の存在価値が見えてきますし、教えられて自分たちがいいことができると、子供たちの自己有用感につながる。さらに、子供たちの自主的な活動そのものが自己有用感につながると思います。「お互いの自己有用感を高めるような活動が持続可能なものであろう」という提言になっていくと思います。

具体的に、試案として事務局から提言します。

「多様な活動や学びの保証」

「部活動と課外活動のあり方についての具体的な提言」。

これは、前回も子供の地域活動のところでされているのですが、さらに一歩進んだ具体的な提言が必要ではないかと考えます。部活動は別な角度からも見直しが叫ばれていますので、子供たちの課外活動はどうあるべきかということ、さらに一歩進める必要があると考えます。

「地域と行政が一体となった取組の促進」

「NPOやNGOとの横のつながり・ネットワークの構築」

この辺については具体的なことをさらに皆さんから御意見をいただければと思います。

今度は宮城らしいコミュニティづくりという点から見ていきます。

「オールみやぎ，震災から学んだことの活用」

「行政の壁，垣根を越えた取組」

「目的でつながるウィン・ウィンの新しいコミュニティづくり」

後継者として地元に住む、または外へ出ていっても、その「根っこ」にふるさとがあるという取組が大切である。これを提言の形にするとこうなります。

「ふるさと，郷土を愛する心の醸成」

「各課横断的な連携による事業の実施」

特にまちづくりの視点では、首長部局と教育委員会の連携は必須である、これまでの取組のレポートからそう言えます。

「公民館ネットワークの構築」

プラットフォームやホームページ等につながる公民館。公民館の課題として、指定管理だろうが、直轄だろうが公民館の横のつながりが非常に薄くなっているのが実態で見られます。補助金の情報を共有したい、研修情報を共有したいと、公民館の職場の方も悩んでいるので、気軽に公民館同士がコミュニケーションできるようなものを構築していきたいと考えます。

「社会教育主事制度やその人の活用」

「はじめよう！「地域学校協働活動」」

県生涯学習課協働教育班が中心になってつくったものなんです、これを活用して、地域と学校がつながり、コミュニティが活発化するような活動が推奨されると思います。

(石塚課長補佐)

・すみません、時間もないところでお手元にですね、こういった冊子のほうをお配りさせていただきました。地域学校協働活動という、ちょっと聞き慣れない活動名でございますけれども、これはですね、文部科学省のほうから示されております。あと、さらに今の社会教育法など改正されまして、地域と学校が連携、協働して行うですね、さまざまな教育活動をこれからは地域学校協働活動として、国並びにあと県のほうでもですね、推進していくというふうなところですね、宮城県におきましては、きょうの説明でも何度も宮城の郷土教育というふうなことで地域と学校がこう連携して協働した取組というのが長年継続してきたところなんですけれども、それをさらに国のですね、この地域学校協働活動という方向に、どのように発展させていくかというふうな視点で取りまとめたものでございます。

これにつきましては、市町村、それから県内の小中学校に配布をしております、これを参考にしながら各市町村の実情に応じて地域と学校が連携してですね、子供たちのより良い教育活動の充実とそれから地域コミュニティの再生を目指すというふうなものでございますので、もしお時間があるときにはお目を通していただければありがたいなと思います。以上です。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。

先ほどですね、大変すばらしいミュージックとともに、調査のときいろんな思いに浸っていたんですが、急に現実的なところにきて戸惑っているところでございます。

すみません、時間もきょう、大変押しております。

今、事務局の蛭名先生のほうから大変こう深い、そしてこう骨太の御説明がございました。確認させていただきますと、視点1からコミュニティの類型について。それから、視点2、キーパーソンについてお話がございました。それから、視点3、公民館、施設等につきましてはのまとめ、提案。

そして、さらにそれを踏まえた報告書の骨子に伴う提言書。骨子ともなり得る項目についての御提案ということで御説明があったところですが、これについてはまだまだ時間を要するのではないかなと思いますが、今の、きょう、御説明のあった段階で御質問等あるいは、御意見等があればどうぞ忌憚なく出していただければというふうに思います。

それをもとにあとは次回、修正あるいは、場合によっては違ったことがらも出てくるのかなと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

(伊勢委員)

・ひとまず、本当に素晴らしい資料をありがとうございました。

二つあります。

一つ目はですね、まずこの提言内容というところで、こういう方向性でというところで示

していただきました，ありがとうございます。

矢印の方向じゃないや・・・その四つの視点ありますね。事務局説明の最後のパワーポイントの中のオールみやぎのところから，ふるさと郷土を愛する心の醸成のところです。その踏まえて，矢印の方向性があるんですか，私に関わらせていただいている地域で，名取市さんとかあるんですが，今回ヒアリングの内容が市民ワークショップになっていたかと思えます。実は，市民ワークショップのこの動きと，あと連動して名取市のヒアリングの中にあつたんですが，その地域力向上講座の開催というところがあつて，その生涯学習課さん主催の，この地域力向上講座のほうの流れがまさにその宮城らしい，世代を超えて宮城らしいコミュニティづくりっていうふうに，今まさにその動きがとられているのではないかなと思いました。

というところでは，やはり公民館主催で・・・生涯学習課さん主催で公民館ごとにやってらっしゃる取組。そこにファシリテーターとして関わらせていただいているんですが，まさに地域住民の方たちが主体的になつて，地縁のつながりでありながら，志でつながる支援組織が立ち上がつていて，それが世代を超えて，まさに世代間のつながりを生んでいるんですね。交流の場と学びの場を同時に生んでいる。

それで，ここにもあるコミュニケーション。あと，補助金の情報共有するところがあるんですが，実際にその団体の人たちが自分たちでもお金を取ってきています。それで自分たちの活動を充実しているっていうような動きがありましたので，なんか，もう少し名取市さんにヒアリングで聞いていただけるとよかつたかなと思うところがありました。

本当に事例として紹介いただけると，今4年目で4地域で団体が立ち上がつてですね，その横のつながりがすごくできてきてるんですね。地域公民館同士だけではなくて，地域同士の，団体同士のつながりができてきて，2年前に立ち上がった団体が，今年度は小学校のほうに行つて，授業もしているっていう，そういうところまでに発展してきているので，それは一つ事例として御紹介できるかなというのがありました。

2点目。石塚先生のほうから今ありました，この地域学校協働活動。まさに私も今，ここに関わらせていただいておりますが，これって本当にとっても大事なことだと思っております。その中で，文科省や県教委さんからもお金をいただいて，そっちの法人のほうで，こうまさにこういうことを実現するために，コーディネーターの存在というのがすごく重要になってくるわけなんですけど，やはり，コーディネーターさんというのは女性の方が多くて，文字ばかりを読むとちょっと抵抗感を感じてしまうという心理的な面がありまして，これを実現するための補足になるような，写真とか絵とかを活用しながらコーディネーターさんの，まあ活動しやすくなるような今冊子をつくる方法を立ち上げております。

なので，今年度中にはその冊子ができ上がるかと思っておりますので，同時に，活用していただけるようにつくりたいと思っておりますので，また皆さんからも御意見いただけたらなと思います。以上です。

(澁谷議長)

・ありがとうございました。

時間が少なくなっていますので、どうしてもこの場で、ここだけは確認しておきたい、あるいは質問しておきたいというのは委員さんがいらっしゃいましたらお願いします。

はい、星山委員さん。

(星山委員)

・今の伊勢さんの名取市での話は聞いております。ちょっと時間がないので言ってしまったのですが、伊勢さんとか東北大の石井山准教授さんがコーディネーターをしてくださって、すごくいい取組をつくってくださって、それをどっかに反映させると思いますが。おっしゃることはすごくよくわかります。

ここで、私が取り上げたいのは、一番最後のところで、特にまちづくりが首長部局と教育委員会の連携が必須というのが出てくるんですが、これはある意味そのとおりだと思うんですけど、これ気をつけなきゃいけないのはですね、やっぱり教育のある教育委員会の独自性というか、自立性をどう保っていくかっていうこと。そのことを考えないと、特に先ほどおっしゃっていましたが、首長部局もいろいろお金持っていたりするので、それはいい面ももちろんあるのですけれども、やはり我々としては教育ということを考えていかなければいけないですし、そういうところで地域と学校がどう連携していったらいいかっていうのがキーパーソンなりあるいは、職員がどう支えていくのかっていうことがメインになってくると思うので、その中で首長部局との連携っていうのをおさえないと、大事なことになるんですけど、強調し過ぎるとちょっとどうなのかなと思います。

(澁谷議長)

・ありがとうございました。

同感でございます。よろしく願いいたします。これからの話し合いの方向にも関わってくるのですが、きょう後半、お示ししていただいたこの内容につきましては、次回、もう一度このあと協議をする場っていうのは設定されるわけですね。

(事務局)

・はい。

(澁谷議長)

・ということで、次回、この今の最終のお話については、別途時間を取って協議いただくというふうなことを確認させていただきました。そのときにまた、ぜひ、これを読み込んでいただいて、さまざまな御意見を賜りたいというふうに思います。

あと、時間があれなんですけど、サブテーマについて話し合いませんか。

(事務局)

・ずっと懸案だったんですが、今日の報告と討議を踏まえて決めましょうということを前回確認しています。

事務局としては、一応A、B、Cを出しました。見てのとおり一番ニュアンスに適しているのはAなのですが、震災前、震災、震災後というのもしつこいかなど。また、前回のご意見の中で、短く、学びと言い切るという案も出されていました。Cの震災からの学び、または震災から学ぶという言い方です。

今日の話合いを生かして、審議テーマの捉え方のほうで、震災からといっても震災前、震災、それから震災後の諸活動を統括する説明を加えるということで、事務局としては、Bを推したいのですが、異論がなければBのテーマをサブテーマとすることでいかがでしょうか。

(澁谷議長)

・はい、わかりました。

前回、震災後の地域活動というふうな御提案があったんですが、中身は全部含んでだけでも、サブテーマとなると前、中、後というふうな、というふうな御意見なども出ました。

それを含めて事務局案でございますがBのサブテーマとして、震災からの学びを通してという広い意味で提案ございましたが、よろしいでしょうか。

(「いいと思います」という声あり)

(事務局)

・はい、ありがとうございます。

(澁谷議長)

・それでは、このサブテーマで承認いただきました。よろしくお願ひ申し上げます。

それでは報告に入らせていただきます。委員の皆様からの報告はございますか。

(「ありません」という声あり)

(澁谷議長)

・事務局からの報告はございますか。

(事務局)

・ありません。

(澁谷議長)

・今日は、大変中身が濃く、たくさんの情報等を賜りました。充実した話し合いになりました。以上で議事を終了させていただきます。

(司会者)

・はい、議事お疲れ様でございました。

それでは連絡に入ります。まず、次回の開催についてご連絡いたします。

次回は、年明けまして平成30年1月下旬に開催したいと考えております。本日、日程調整表をお渡しをいたしました。本日もしくは、後日提出していただければと思います。今回、及び前回の議事録は近日中に公開いたしますので、ごらんください。

事務局から何か連絡ありますか。

(事務局)

・では、2点連絡申し上げます。

まず、お手元に美術館のチラシがあります。現在、フィンランドデザイン展を開催しております。12月24日クリスマスイブまで開催しておりますので、ぜひごらんいただければと思います。

さらにもう一つですね。じゃあ、菅原主任主査お願いします。

今日の話合いにも絡むのですが、この会の出張ということにはならないのですが、12月5日に公民館等職員研修会を実施します。かなり中身の充実している研修会をやらせていただいておりますが、今回の内容について、簡単に説明をお願いします。

(菅原主任主査)

・今回、4回目ですけれども12月5日に社会教育で福祉を開くというテーマで自主夜間中学の事例、あと子ども食堂の事例。新しい被災地石巻での仮設住宅からの住民による新しいコミュニティの事例というような形で、広い社会教育の視野で、まざまな視点から公民館職員研修の計画を立てております。その中で今回3事例を取り上げて、研修会を行う予定です。

(澁谷議長)

・すみません、資料をお願いします。

(資料を配布)

(菅原主任主査)

・今お渡しした実施計画のような形で、裏側と2枚目に詳しく今回の研修会の趣旨を載せてあります。昨年度から講義一辺倒の研修ではなく、検討会委員を立ち上げて、自分たちが学びたい内容を吟味しながら、事前に現地視察をしたり、聞き取り調査事前学習をしたりして、本番の研修会では受講者にとってどのような学びを提供できたら良いか検討会を重ねながら、1回、1回研修会を開催しております。今回は4回目です。さまざまな形でこの会のキーワードに出てくるようなことがありましたので御紹介いたしました。

(事務局)

・よろしく願いいたします。

最後に今日の御意見を反映して、残り2回ですので、公民館調査の結果も含めた第1次案を会議前に皆様にお送りし、お目通しいただいて当日の会議に具体的な御意見をいただければよいようにしたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。以上です。

(司会者)

・以上をもちまして第34次第8回宮城県社会教育委員会を閉会いたします。

長時間に渡り御審議ありがとうございました。